

教師からの叱りに対する生徒の反応とビッグファイブ性格特性との関連

The Relationships between Students' Responses to Being Reprimanded by Teacher and the Big Five Personality Traits

阿部晋吾¹・太田仁¹・福井斉¹・渡邊力生²

ABE Shingo, OTA Jin, FUKUI Hitoshi, WATANABE Rikio

We examined the relationships between junior high school students' experience of being reprimanded by a teacher and the Big Five personality traits. A total of 541 students (277 female, from 13 to 15 years old) completed the questionnaire. The results showed that students' rejection of reprimand led to an increase in troubled behaviors and worsened relations between teacher and student. In contrast, students' acceptance of reprimand was related to improvements in behaviors and better relations between teacher and student. Students with high Agreeableness and Conscientiousness tended to accept reprimands. Moreover, Agreeableness was related to good relations, Conscientiousness to improvements in behaviors, Neuroticism to acceptance of reprimand, and Openness to worsened relations.

Key words: reprimand, Big Five personality, teacher-student relationship

教師からの叱りには、肯定的な側面と否定的な側面がある。ここでいう叱りとは、“個人が不当と認識する行為を相手に指摘し、改善を求める行為”(阿部・太田, 2014)と定義できるが、肯定的な側面としては、“行動 A は社会的に望ましくないから、行動 B をすべきである”という、児童生徒の社会化を促すための、教育的観点からの価値体系のフィードバックの機能を上げることができる。一方、否定的な側面としては、叱られたことによって児童生徒の自尊感情が傷ついたり、教師のことを脅威の対象としてとらえ、生徒が教師との関係を回避したりすることなどが挙げられる。

阿部・太田(2012)は中学生における叱られ経験の実態に関する基礎的な分析を行い、8割以上が過去1年間に教師から叱られた経験があり、7割弱がその後叱られた行動をしなくなり、8割弱が叱られた後で教師との関係には大きな変化がないことを明らかとしている。ただし、教師から叱られたことで児童生徒がどのように反応し、その結果として教師-生徒関係がどのように変化するのかについては、これまでに十分に明らかになっていない。怒りの表出に関する研究(阿部・高木, 2005)では、他者からの怒りに対して被表出者(怒られた個人)がどのように反応するかが、その後の表出者との関係や問題の解消度に影響することが明らかとなっている。具体的には、“責任の否定”や“反発”といった責任拒否的な反応はその後の表出者との関係を疎遠にしやすく、“その場からの逃避”“無視”といった責任回避的な反応は問題の解消を阻害することが示された。怒りの表出と叱りは概念的に重複する部分もあるので、本研究ではこの知見を参考にしつつ検討を進めることにする。

叱りに対する反応の差異には、個人特性の影響も考えられる。例えば対人葛藤に関する研究では、協調性の高い個人は、対人葛藤場面において自分の責任を受容しやすいことが示されている(Graziano, Jensen-Campbell, & Hair, 1996)。教師からの叱りは、生徒にどのような反応を引きおこし、どのような結

¹ 梅花女子大学心理こども学部心理学科

² 梅花女子大学心理こども学部心理学科 非常勤講師

果をもたらすのだろうか。さらに、このプロセスにはどのような性格特性が関連しているのであろうか。阿部・太田(2014)は性格特性としての自己愛傾向を取り上げ、叱られた理由の推測とその後の援助要請態度との関係を検討しているが、叱られ経験後の反応そのものを検討したわけではない。

近年の性格特性論において主流となっているのはビッグファイブ(Goldberg, 1990, 1992)や5因子モデル(McCrae & Costa, 1987)である。この2つの理論に共通するのは、性格特性を、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5つの大きな枠組みでとらえることである。ビッグファイブあるいは5因子モデルに関する尺度はこれまでに多く開発されているが、その中でもGosling, Rentfrow, & Swann (2003)は、ビッグファイブの5特性全体をわずか10項目のみで測定するTen Item Personality Inventory (TIPI)を作成している。小塩・阿部・カトローニ(2012)はその日本語版を作成し、再検査法による十分な信頼性と、既存の複数のビッグファイブ尺度との併存的妥当性を確認している。この尺度はビッグファイブの幅広い概念範囲を少ない項目でカバーできており(Oshio, Abe, Cutrone, & Gosling, 2013)、また、Gosling et al. (2003)が作成したオリジナルの英語版 TIPI と概念的に対応していることが確認されている(Oshio, Abe, Cutrone, & Gosling, 2014)。

本研究では、叱りに対する生徒の反応とその後の影響過程について、ビッグファイブ性格特性との関連も含めて検討する。

方 法

調査対象者および調査方法

2010年12月に、三重県中央部の公立中学校1年生から3年生を対象に調査を実施し、541名(男子264名、女子277名)から回答を得た。そのうち本研究では、現在の学年になってから叱られた経験が一度もないと回答した生徒については除外し、439名を分析対象とした。

質問項目

本研究では、叱られ経験を“今の学年になってから、あなたが担任の先生から叱られたできごと”に限定し、その中で最も強く叱られた経験を1つ想起してもらった。質問項目は、叱られ経験後の反応(9項目。Table1 参照。“1.していない”から“4.とても強くした”までの4件法)、叱られ経験後の行動の変化(以下、“行動の変化”とする。“先生からしかられたことを、あなたはその後もしていますか”の1項目。“1.前よりもするようになった”“2.前と変わっていない”“3.前よりもしなくなった”の3件法)、叱られ経験後の教師との関係の変化(以下、“関係の変化”とする。“しかられた後で、あなたと先生との関係は変わりましたか”の1項目。“1.悪くなった”“2.前と変わっていない”“3.良くなった”の3件法)で、いずれも阿部・高木(2005, 2007)を参考に作成した。ビッグファイブ性格特性の測定には、小塩他(2012)の日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)を使用した。この尺度はビッグファイブ性格特性の各側面に対応する2項目(正方向と負方向)、計10項目で構成され、選択肢は“1.全く違うと思う”から“7.強く思う”までの7件法である。

結 果

尺度の構造確認

叱られ経験後の反応について因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った(Table1)。その結果、スク

リープロットによる固有値の減衰状況や、因子の解釈しやすさから 2 因子構造が適当と判断した。第 1 因子は、“無視した”“反抗的な態度をとった”“その場から離れた”“気にしていないふりをした”“言い訳をした”の 5 項目が含まれたことから、“責任拒否的反応”と命名した($\alpha = .74$)。第 2 因子は“先生に指示されたとおりにした”“反省していることを行動で示した”“謝った”の 3 項目が含まれたことから、“責任受容的反応”と命名した($\alpha = .65$)。“なぜ注意するのか、先生に説明を求めた”はいずれの因子にも高い負荷がみられなかったため、以降の分析からは除外した。

Table1 叱られ経験後の反応の因子分析結果

	F1	F2	<i>M</i>	<i>SD</i>
無視した	.74	.00	1.32	0.73
反抗的な態度をとった	.65	-.20	1.50	0.88
その場から離れた	.61	.16	1.30	0.71
気にしていないふりをした	.53	.05	1.64	0.85
言い訳をした	.52	.01	1.61	0.88
なぜ注意するのか、先生に説明を求めた	.35	-.03	1.40	0.85
先生に指示されたとおりにした	.07	.74	2.51	1.06
反省していることを行動で示した	-.06	.60	2.24	1.00
謝った	.05	.53	2.21	1.08
因子間相関				
F1: 責任拒否的反応($\alpha = .74$)	1.00	-.32		
F2: 責任受容的反応($\alpha = .65$)		1.00		

モデルの検証

構造方程式モデリングによるパス解析を行った。各変数間の相関係数を Table2 に示す。叱られ経験後の反応の 2 因子から関係の変化、行動の変化それぞれへのパスを設定し、さらにこれらすべてに対してビッグファイブ性格特性からのパスを設定した。また、ビッグファイブ性格特性の 5 因子間、叱られ経験後の反応の 2 因子間には共分散を設定した。こうした設定を行った上で分析したところ、有意でないパスがみられたため消去した。その結果、Figure1 に示したモデルが最終的に得られた(誤差項および共分散は省略)。適合度指標は CFI=.996, RMSEA=.013 で、データに対するモデルのあてはまりは良好といえる。

Table2 パス解析に使用した各変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 神経症傾向	1.00									4.19	1.29
2 外向性	-.10 *	1.00								4.61	1.47
3 開放性	-.06	.29 **	1.00							4.23	1.15
4 協調性	-.15 **	-.13 **	-.01	1.00						4.34	1.17
5 勤勉性	-.17 **	.11 *	.13 **	.27 **	1.00					3.47	1.23
6 責任拒否的反応	.01	.04	.03	-.31 **	-.17 **	1.00				1.23	.47
7 責任受容的反応	.06	-.04	-.05	.16 **	.16 **	-.21 **	1.00			2.32	.80
8 行動の変化	-.02	-.08	-.09	.12 *	.17 **	-.24 **	.20 **	1.00		2.59	.64
9 関係の変化	-.06	-.06	.03	.22 **	.13 **	-.17 **	.24 **	.18 **	1.00	2.04	.43

* $p < .05$, ** $p < .01$

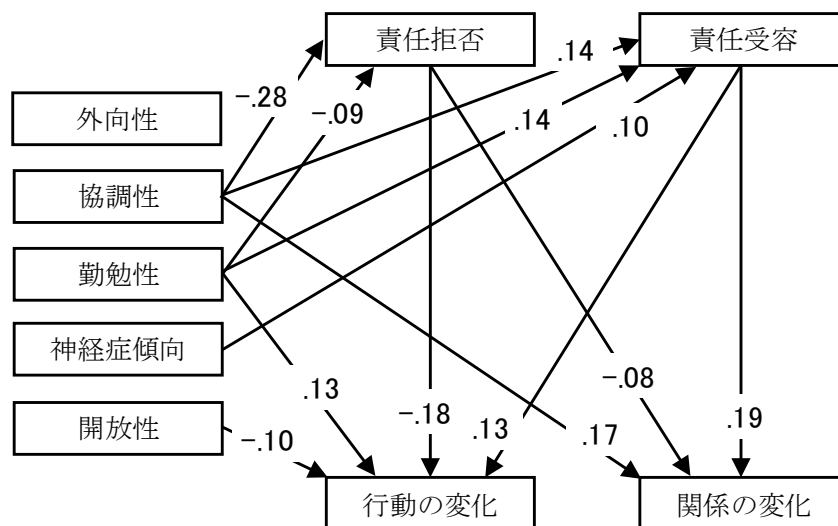


Figure1 パス解析の結果(標準化係数。パスはいずれも $p < .05$)

責任拒否的反応は、行動の変化と関係の変化との間に負の関連がみられた(それぞれ $\beta = -.18, \beta = -.08$)。その一方、責任受容的反応は、行動の変化と関係の変化との間に正の関連がみられた(それぞれ $\beta = .13, \beta = .19$)。性格特性の影響としては、協調性と勤勉性は、責任拒否的反応とは負の関連(それぞれ $\beta = -.28, \beta = -.09$)、責任受容的反応とは正の関連(それぞれ $\beta = .14, \beta = .14$)がみられた。また、協調性は関係の変化と正の関連($\beta = .17$)、勤勉性は行動の変化と正の関連($\beta = .13$)がみられた。その他に、神経症傾向は責任受容的反応と正の関連($\beta = .10$)、開放性は行動の変化と負の関連($\beta = -.10$)がみられた。

考 察

本研究の目的は、叱りに対する生徒の反応とその後の影響過程について、ビッグファイブ性格特性との関連から検討することであった。

叱られ経験後の反応の因子分析の結果、阿部・高木(2005)と同様に、責任拒否と責任受容という、概念的には相反する2つの因子が得られた。しかし因子間相関はそれほど強い負の相関がみられるわけではないことから、叱られた際にいずれの反応も行わない、あるいは同時的にいずれの反応も行うケースも十分にありうる事が考えられる。

パス解析の結果より、責任拒否的反応は、問題行動や教師-生徒関係の悪化をもたらしやすいのに対し、責任受容的反応は、その反対の影響を及ぼすことが明らかとなった。これは阿部・高木(2005)の知見とも整合する結果であり、叱りにおいても怒りの表出と同様の影響過程が確認された。

性格特性の影響としては、協調性と勤勉性が高い個人は、自分の責任を拒否せずに、受容しやすい傾向がみられ、それと同時に、協調性は関係の変化、勤勉性は行動の変化との間に肯定的な関連がみられた。さらに、神経症傾向は責任受容的反応を生じさせやすく、開放性は問題行動の悪化につながりやすいという、各性格特性に固有の影響過程も明らかとなった。

協調性、勤勉性は、いずれも責任拒否的反応とは負の関連がみられ、責任受容的反応とは正の関連がみられた。このうち協調性と責任受容的反応との関連については、Graziano et al. (1996)の結果とも合致する結果である。これらの性格特性は社会生活上において望ましいとされる特性であり、叱られた際に

も教師に従いやすい傾向がみられたのだと考えられる。特に、勤勉性は自己制御などの個人の行動的な側面、協調性は人間関係の調整の側面に関わる特性のため、それぞれ行動の変化、関係の変化に対して、肯定的な関連がみられたのであろう。

開放性は、行動の変化とは負の関連がみられた。これは開放性が問題行動の悪化につながりやすいことを意味する。開放性が高い個人は権威、しきたり、伝統的価値といったものにとらわれないという特徴があるため、価値伝達としての叱りに対して抵抗を感じ、心理的リアクタンスが生じたことで、叱りとは正反対の方向への行動変化が生じたのかもしれない。ただ、こうした開放性の影響過程が、第二次反抗期にあたる中学生特有の現象なのか、それとも成人期以降にもみられるのかについては更なる検討が必要である。

神経症傾向は、責任受容的反応とは正の関連がみられたが、行動の変化、関係の変化とは関連がみられなかった。これは神経症傾向による責任受容は、不安や緊張から逃れるために指示にしたがうといった性質のもので、叱りの内容を内面化させたものではない可能性も考えられる。そのため、表面的には謝罪などの反応がみられるが、具体的な行動の変化や関係の変化とは結びつかないかもしれない。教師のことを脅威の対象としてとらえている可能性もあり、これについては教師に対する印象の変化などもあわせて検討すべきだったかもしれない。

本研究の問題点としては、一時点での調査研究であり、叱られ経験を時系列的にたどったものではないという点が挙げられる。複数の時点での調査を実施すれば、より明確に因果関係を特定することが可能であり、実際の関係の変化や行動の変化もとらえることが可能となる。日誌法などを用いた縦断的な手法も今後用いる必要があるだろう。また、使用した変数の問題点として、行動の変化、関係の変化は3件法の単一項目のみで測定しており、分布にも偏りがみられるため、信頼性、妥当性の確立された尺度においても同様の結果が得られるかは、さらに研究を積み重ねていく必要がある。対象者についても、本研究では1つの中学校のみを対象に調査を実施しており、結果の一般化可能性は限定的であると言わざるをえない。たとえば叱られ経験後の反応において、本研究の対象者では責任拒否的反応の平均値が非常に低くなっており、十分な分散も得られていない。さまざまな背景を持つ複数の学校を対象にして調査を実施することで、より多様な反応が得られる可能性も考えられる。

引用文献

- 阿部晋吾・太田仁 (2012). 中学校における教師からの叱られ経験の実態 梅花女子大学心理こども学部紀要, **2**, 75-81.
- (Abe, S. & Ota, J. (2012). Students' experiences of being reprimanded in junior high school. *Baika Women's University Research Bulletin - Faculty of Psychology and Children's Studies*, **2**, 75-81.)
- 阿部晋吾・太田仁 (2014). 中学生の叱られ経験後の援助要請態度: 自己愛傾向による差異 教育心理学研究, 教育心理学研究, **62**, 294-304.
- (Abe, S. & Ota, J. (2014). Junior high school students' attitudes toward help seeking after being reprimanded: Differences between students' high and low in narcissism. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **62**, 294-304.)
- 阿部晋吾・高木修 (2005). 怒り表出の対人的効果を規定する要因: 怒り表出の正当性評価の影響を中心として 社会心理学研究, **21**, 12-20.

(Abe, S. & Takagi, O. (2005). The determinants of the interpersonal effects of anger expression: Focusing on the influences of the justice evaluation of anger expression. *Japanese Journal of Social Psychology*, **21**, 12-20.)

阿部晋吾・高木修 (2007). 被害者が示す怒りに対する加害者の認知的・行動的反応を規定する要因 社会心理学研究, **22**, 258-266.

(Abe, S. & Takagi, O. (2007). Determinants of a perpetrator's cognitive and behavioral responses to an expression of anger by their victim. *Japanese Journal of Social Psychology*, **22**, 258-266.)

Goldberg, L. (1990). An alternative “Description of Personality”: The big-five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1216-1229.

Goldberg, L. (1992). The development of markers for the big-five factor structure. *Psychological Assessment*, **4**, 26-42.

Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B., Jr. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, **37**, 504-528.

Graziano, W. G., Jensen-Campbell, L. a, & Hair, E. C. (1996). Perceiving interpersonal conflict and reacting to it: the case for agreeableness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 820-835.

McCrae, R. R., & Costa, P. T., Jr. (1987). Validation of the Five-factor model of personality across instruments and observers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 81-90.

小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)作成の試み パーソナリティ研究, **21**, 40-52.

(Oshio, A., Abe, S., & Cutrone, P. (2012). Development, reliability, and validity of the Japanese version of Ten Item Personality Inventory (TIPI-J). *The Japanese Journal of Personality*, **21**, 40-52.)

Oshio, A., Abe, S., Cutrone, P., & Gosling, S. D. (2013). Big Five content representation of the Japanese version of the Ten-Item Personality Inventory. *Psychology*, **4**, 924-929.

Oshio, A., Abe, S., Cutrone, P., & Gosling, S. D. (2014). Further validity of the Japanese version of the Ten Item Personality Inventory (TIPI-J): Cross-language evidence for content validity. *Journal of Individual Differences*, **35**, 236-244.